

絶滅危惧の水生昆虫 放流

保全協議会が繁殖活動

シャープゲンゴロウモドキ

関東地方では房総半島の一部地域でしか生息が確認されていない絶滅危惧種の水生昆虫「シャープゲンゴロウモドキ」の自然界での個体数を増やそうと、県シャープゲンゴロウモドキ保全協議会が、幼虫105匹を県内の山間部に初めて放流した。「元気に育ってほしい」と関係者は期待を寄せている。

シャープゲンゴロウモドキは、体長3センチほどのゲンゴロウの仲間。協議会メンバーである鴨川市の水族館「鴨川シーワールド」によると、関西型と関東型に分かれ、いずれも一時は絶滅したと考えられていたが、1984年に富津市で再発見され、その後、日本海側の数県でも生息が確認された。

しかし、埋め立てなどの開発、圃場整備、外来種の影響、乱獲などで生息数

が激減、2011年に「種の保存法」で「国内希少野生動物種」に指定され、許可なく捕獲したり売買したりすることが禁止された。環境省レッドリスト(19年公表)では「絶滅危惧I A類(CR)」に分類されている。

こうした危機を背景に、保全協議会が保全活動を推進、同水族館も10年から参加した。協議会傘下の保全研究会メンバー、辻功さんから雌雄3匹ずつを譲り受けて繁殖活動を始め、試行錯誤を繰り返しながら、これまで1400匹を孵化させた。

今回の放流は、保全研究会などが地元地権者の協力で、シャープゲンゴロウモドキの生息に適した保全地を整備したことで実現。放流された幼虫105匹は、辻さんと同水族館がそれぞれ繁殖した。幼虫はサナギの段階を経て約25日で成虫となり、翌年の早春には産卵することが期待されると



シャープゲンゴロウモドキの幼虫を保全地に放流する鴨川シーワールドのスタッフ(鴨川シーワールド提供)



絶滅危惧種に指定されているシャープゲンゴロウモドキ(鴨川シーワールド提供)

いう。同水族館開発展示課の森一行さん(58)は「ようやく放流にこぎつけた。繁殖した個体が自然の中で数を増やしてくれば」と話している。同水族館では、入り口近くのエコアクアローム「房総の里山」水槽で繁殖した個体の一部を展示している。